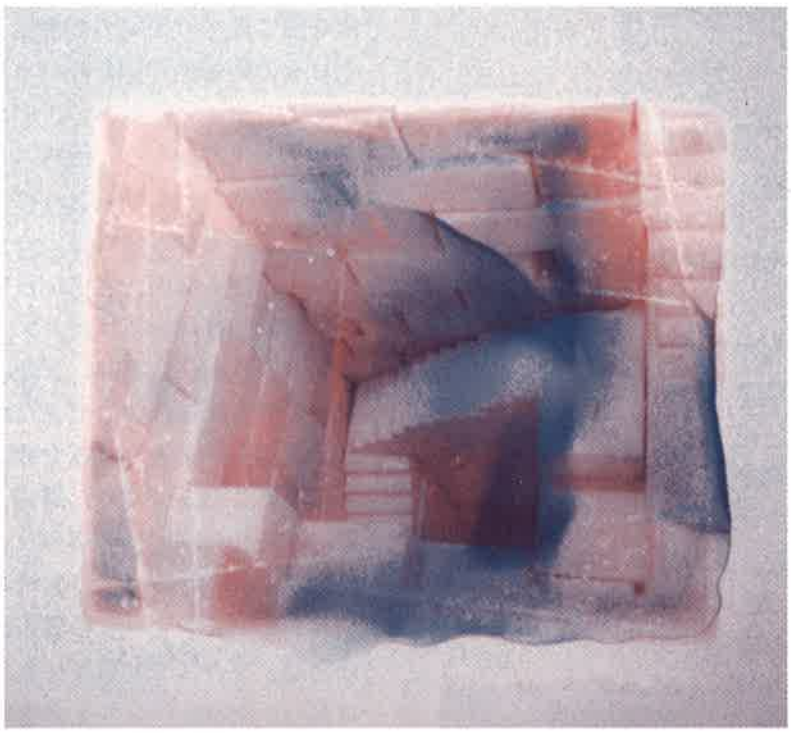
iTEM

文化学習情報誌
アイテム

VoL.3

平成8年度版

エッセイ 音楽ほっとらいん　川澄 健一
我が心の伊丹に捧げるお父ちゃんの歌　BORO（ロックミュージシャン）
進む臨死体験研究 その意味するもの　カール・ベッカー
託児付フィットネスラスタ
育てよう「人権文化」



「記憶」　栃山（とちやま） 孝（たかし） 製作　サイズ 425×345

財団法人 伊丹市文化振興財団

伊丹市立図書館南分館

目　次

— CONTENTS —

巻頭言

我が心の伊丹に捧げるお父ちゃんの歌……1

シンクロ世界選手権二位の経験を生かして……2

私のパソコン体験泣き笑い物語……3

「いじめ」に負けない教育プログラム……4

講座同行ルポ「中高年の健康登山ハイキング」…5

アイホールウォッチング

アイホールに集う人々……6

アイフォニックホールウォッチング

実力派がそろう伊丹市吹奏楽団 ……8

ラスタホールウォッチング

ラスタ生涯学習フェスティバルほか……10

講演会（誌上再録）

進む臨死体験研究、その意味するもの……12

ママ業しながらエアロビしたい

託児付フィットネスラスタ……15

もっと知りたい人権の輝き

育てよう「人権文化」……16

エッセイ

音楽ほっとらいん

川澄健一

今日は久しぶりの寧日（ねいじつ）。書斎から見える青空に、白い雲が雲を呼び、風はすがすがしい風を呼んでいる。雲は見えても風は見えない。音楽だって見えやしない。それなのに何かを囁（ささや）き人を呼ぶ。迫ってくる。知っている音楽、知らない音楽、いずれにしても聞くものを、音楽美に酔わせ、無心にし、夢を追い、なぐさめと希望を湧かせてくれる。すばらしい力を持っている。長い間、音楽と共にきて、西風もあったが随分めぐみをうけてきた。折にふれとめどなく音楽の想い出が頭をかすめる。口内であったり、口外であったり。音楽を通じて人生をきびしく眺めたり、人生を音楽になぞらえてポジティブに眺めたり。今日は家にいてたのしいひとときである。

昔、中国の禅僧香厳（きょうげん）が庭を清掃中、瓦礫を竹に向かって投げた瞬間その音により悟りを得たという故事から香厳の撃竹という言葉があるが、誰にもそれに似た経験があるもの。作曲するときもしかり。散歩、車中、旅の時もあるが、手近に自転車に乗って家を出て近くの金岡川を渡り、ハンドルを右か左へかはその時まかせ、それからしばらくのフィーリングがとてもよい時がある。そのうち雑念が入ってきて駄目。さあかえろと帰路につくとここがまたよいから不思議。どうやらアイディアは狭い部屋よりアウトドアの方が自分にはよいらしい。曲は最初から作るとは限らない。途中からでも終わりからでもよいが、仕上げ伴奏づけはピアノもろとも。

童謡、歌曲、合唱曲、音頭、コマーシャル、校歌、社歌、劇音楽を作曲してきたが、今や高齢化時代を迎え子供から家族ぐるみで歌える新しい歌がほしいものだ。こども、学童、母親、職場の音楽指導を経験、現在伊丹高齢者の寿コーラスを指導して22年経つ。メンバーのパワーは素晴らしい。またＮＨＫ、ＭＢＳ音楽コンクールの審査員をして、伊丹の学校の合唱、ブラスを40数年にわたりきいてきたが水準は高い。シティフィルも各合唱団も健在。21世紀も間近か。伊丹の音楽文化発展を祈ってやまない。

川澄健一 プロフィール

1913年大阪生まれ。滋賀大卒。伊丹市民文化賞、滋賀県文化賞受賞。日本音楽著作権協会正会員、日本童謡協会員、伊丹市芸術家協会副代表幹事。

長年にわたり作曲、編曲活動をつづけるかたわら音楽教育やコンクール審査員もつとめ、音楽文化の発展に寄与、平成８年には毎日放送ラジオ番組「くめどつきせぬ川澄健一 82才のフォルティッシモ」が文化庁の芸術作品賞を受賞。

巻頭言

我が心の伊丹に捧げる お父ちゃんの歌

この世で一番綺麗（きれい）な夕焼けが、埃（ほこり）とすすだらけの少年達の顔を赤く染める頃、三菱電機の終業のサイレンが鳴り響き、工員さん達の群れが、自転車にまたがり帰ってくる。その顔も又、子供達と同じように、黒くすすけていた（昭和三十年代）。ここは、伊丹市若菱町の三菱電機の社員寮の敷地内（現在三菱総合グランド）。その自転車の軍団の中に幼い私は、自分の父の姿を見つけ出し、こう叫ぶ。「おとうちゃん！」父が自転車を止め手招きする。私は荷台に飛び乗る。自転車は、わが家に向かい又走り出す。

昭和二十九年三月十一日、私はこの七寮の一室で、産婆さんにとり上げられた。私の父は、森本休里（きゅうざと）と言うペンネームで、多くの川柳を残している。

産み月の　妻黙々と　針運ぶ

手を広げ　海の大きさ　子に言えず

私が一番好きな父の川柳は、である。

昨年の二月、私は、父の生まれた兵庫県出石郡にスタジオを構えた。スタジオと言っても、水車小屋を改造したバラックの小屋である。父は生前（平成三年五月十一日他界）、「出石に行ったらえ歌いっぱい出来るで」と私に語っていた。

昨年は、そのスタジオで、三十曲作った。目標は六十曲だったが、スタジオのペンキ塗とか、雨漏りの修理とか、土間にいろりを作ったりとか、地域の人たちとの交流とかに結構時間を使い、目標の半分しか出来なかった。しかし何度も父の夢を見た。父の川柳の作品集をなつかしく読みふけったりした。

五月のある日の真夜中、父のエッセイを読んでいて、大泣きしたことがある。涙がかってにどんどん出てきて、しまいに嗚咽（おえつ）になり、大きな大きな声を出して泣いた。そのエッセイは職場での出来事を、ただ、たんたんと綴ったものだった。父が亡くなって、始めて本気で泣けたので、めちゃくちゃ気持ちよかった。

筋ジストロフィー患者の方々の為の「ＡＹＡＫＡ基金」も、設立から三年になる。私は医者ではないので治せないが、歌を歌って募金活動は出来る。難病の克服は、お金がかかる。厚生省も薬品会社も、医療機関もふざけている。

私は今日も大声で歌う、明日も歌う、本当の事を。当たり前の事を歌いつづける。天国のおとうちゃんに聞こえるように。

ブランコを　父は根よく　押してやり

休里

ロック・ミュージシャンBORO（ボロ）（プロフィール）

1954年伊丹市生まれ。小学生の頃から作詞・作曲を始める。1979年内田裕也氏プロデュースによる「都会千夜一夜」でデビュー。同年出された「大阪で生まれた女」が大ヒットとなる。その後100人以上のアーティストへの楽曲提供、映画音楽の監督をつとめたりとシンガー以外での活躍もめざましい。

シンクロナイズドスイミング世界選手権競技会で第二位の経験を生かして、ラスタホールで水泳指導を続ける伊丹の人魚（マーメイド）

阪（さか）　育子（やすこ）さん

多忙な毎日の中で健康、文化、学習に取り組んでいる人たちの瞳は輝いています。そんな人たちの実践例を紹介します。

「こんにちは！」

四階のエレベーターのドアーが開くと、フィットネスのスタッフたちが元気な声で迎えてくれます。そして、温水プールに足を入れると、こぼれるような笑顔と太陽にも似た輝きにあふれる光景が目にとびこんできます。

ラスタホール自慢のフィットネス施設で、水泳関係の教室を指導する阪育子さんのパワフルな声とリズミカルな身のこなしに思わず引き込まれそうになります。

水泳の世界でも特異な、シンクロナイズドスイミング一筋に生きてきた三十年間。ふたご姉妹の妹で、九歳のときに家から電車で一時間のところにある浜寺水練学校へ姉の昌子さんと一緒に行くまで、全く泳げなかったそうです。

（プロフィール）大阪市生まれ。選手とコーチをへて、結婚。伊丹に住んで十二年になります。

シンクロは、昭和二十九年に日本に入ってきたスポーツで、阪さんが中学一年生のときに、全米選手権から帰国した先輩の姿を見て、この種目を選んだ、とのことです。

その後、日本を代表する選手として活躍。一九七三年第一回世界選手権（ユーゴスラビア大会）と一九七五年の第二回世界選手権（コロンビア・ガリ大会）で、デュエット三位。そして一九七八年第三回世界選手権（西ベルリン大会）で同じくデュエット二位に輝きました。ロサンゼルス五輪大会（一九八四年）でシンクロが正式種目に。

ラスタホール４階の温水プールでの一コマ

これまでメダルやトロフィーを獲得してきた阪さんですが、すべてが順風満帆だったわけではなく、特に欧米女性との体格のちがいや、コーチの指導法で悩みを持ち続けたとのことです。そんな苦しみの中で学びとったことは「世界の強豪を相手にするわけだから、結局は自分を信じ、自分の長所を最大限に主張することでした。」と当時をふりかえる。

選手を引退した後は中学三年から高校三年生の女子選手の育成を引き受けますが、競技以外に、受験勉強の不安とか、体格に悩む年頃でもあり、それらを共有しながら教えることのむずかしさに苦しんだとのことです。

現在、ラスタホールで夏休みに開かれる子ども水泳教室をはじめ、成人を対象にしたリズム水泳、水中ジョギング、ウォーターエクササイズなどの生涯にわたるスポーツ指導者として、選手時代やコーチ時代とはちがった、水にふれる楽しさを追い続け、それを広める活動に多忙な毎日をすごしています。

いまでもトレーニングを欠かさない阪育子さん

私のパソコン体験泣き笑い物語。昔の機関車のような電子計算機が机（デスク）の上に乗っているのにびっくり！

岡山（おかやま）　享（とおる）さん

「さわってみたいけれど、ちょっとこわい」…。近ごろパソコンは、何かと気になる存在になりました。私たちの家庭にもかなり普及してきており、持っている人は四割以上に達するとのデーターもあります。

さて、五〇歳でパソコンを始め、数々の失敗をものともせず、独力でマスターをめざす岡山さんを訪ねてみました。

案内された部屋は、自宅の庭に建てられたプレハブハウス。種類の異なるパソコンが二台とプリンター、モデム、スキャナーが置かれ、本棚にはパソコンに関する本が所狭しと並んでいます。

日曜日には、近所のパソコン仲間が集まり、わいわいがやがやのパソコン勉強会がはじまります。

岡山さんは、戦時中の学徒動員で、海軍航空隊に入ったものの、乗る飛行機もなく、毎日モールス信号を打ったり、逆に解読する訓練ばかりしていたそうです。

戦局が悪化するなかで、特攻兵器が完成したという情報が伝わり、その搭乗員に志願。やがて、長崎県の大村湾で二ヶ月ばかりの訓練を受けたとのことでした。でも、新兵器とは名ばかりの、木造の小型ボートに、自動車のエンジンと船首に爆弾をつみこんだだけのもので、「震洋（しんよう）」と名付けられていました。

岡山さんの愛機がならんでいる

多くの仲間たちが九州の基地から出撃したとのことで、岡山さんの順番がくる前に終戦となりました。

戦後は、モールス信号ができるという理由で、戦地から引き揚げてくる船などの通信のための仕事に従事。朝から晩まで、モールス信号を打っていたそうで、そのおかげでずいぶんと腕をあげ、全国競技会に出場し、二年連続の優勝に輝きました。

やがて、職場の名称が電電公社（ＮＴＴの前身）にかわり、モールス信号機もテレックスタイプライターという機械に様がわり。昭和三十七年に、近畿支社に転動したときに、電子計算機に出会い、それを動かすために四苦八苦の毎日をすごしたとのこと。当時の電子計算機は大きな機関車のようなもので、点検も大変で、スムーズに動いてくれなかったと苦労話をされていました。

五〇歳のときに、パソコンに出会い、それまでつき合ってきた大型の計算機と同じ、いやそれ以上の性能があって、しかも超小型になっていることに、驚いたそうです。パソコンと機関車のような大型電子計算機は、取り扱う方法も大きく異なり、また一からコツコツと自分流の勉強を始めるのでした。何度の失敗をものともせず、きょうまでやってきたとのこと。

今、あの戦争で死んでいった戦友を思い、回想録をパソコンで作っている最中。戦友の同期会の会報や名簿管理もパソコンでしているとのことです。

パソコンの専門用語がわからなくても平気の、自分だけのパソコンとのつきあい方をみつけることが、上達の秘訣だそうです。

パソコン関係の本がぎっしりと…

「いじめ」に負けない教育プログラム
模擬寸劇（ロールプレー）を見て・体験して・自分を守り・友だちも助ける…。

「いじめ」は依然、後を絶ちません。

そんななか、子どもたちに「自分の大切さ」を教え、一人ひとりが本来持っている「強さ」を引き出して、いじめの被害や再発を防ぐ米国の子ども虐待防止プログラム（CAP）に、日本でも関心が高まっています。

伊丹市立生涯学習センターで、このCAPプログラムを実践する初の講座が開かれました。会場にあてられた三階の講座室には、あらかじめ受講申込みのあった児童十三名とその保護者らの合わせて二十二名が参加しました。当日取り上げられたケースは次の四事例でした。

上級生にランドセルを持たされ、子分になるように脅（おどか）されるケース。見知らない人に道を聞かれ「お母さんがけがをしたので病院に行こう。」とだまされ、連れ去られそうになるケース。男の子が遊びに行った先で、親戚の大学生からキスをされそうになるケース。そのことを学校の担任の先生に相談に行くケースで、それぞれを模擬寸劇（ロールプレー）にして、子どもたちに見せます。それを見た子どもたちが、前に出てきて、劇中の子どもになりきり、どうすればいいのかを考え、再現する内容になっています。

寸劇を見たり、参加することを通して、人としての大切な権利がおびやかされそうになったとき、「いやと言う」「逃げる」「だれかに話す」のいずれかを行使して、自分を大切にすること、自分を守ること、また、友だちと助け合うことも学び合います。

指導は、保育ルーム「アリーテ」の松浦さん、長澤さん、荒東さんの三人で「小さい子どもに権利を理解してもらえるか晨初は不安だったが、みんなスッと分かってもらえたようです。」と語ってくれました。この三人は、大阪で開かれた指導者勉強会に参加して、資格を取得しています。

ただ、いじめられっ子を友だちが助ける寸劇のシーンでは「だれか、助ける役をしてくれないかなぁ。」と募ると「いや！」と答える子もいて、いじめの現実を垣間見る思いがしました。

CAPは、Child Assault Preventionの頭文字をとったもので、一九七八年に米国オハイオ州のレイプ救済センターで作られたプログラムで、その後改定され、子どもがいじめや虐待などから自分を守るための教育プログラムとして普及。全米の子どもの三分の二が一度は、このCAPプログラムに参加し、うち四割が習ったことを生かして、いじめや暴行を受けずにすんだという調査があります。

いじめや虐待を受けた子どもたちは、そのとき周りがどうサポートしたかで、いやされ方もその後の人生も変わります。子どもが沈黙を破って、話し始めたとき、共感を持って聞き、温かく受けとめてみたいものです。

講座同行ルポ
「中高年の健康登山ハイキング」
目のさめる緑のシャワーを浴びて…

伊丹市立生涯学習センターの講座「中高年のための健康登山ハイキング」に同行しました。けっこうきびしかった一日をルポします。

仕事におわれ、不健康を絵に描いたような生活を送っている毎日。今回、この講座に同行を申し込んだものの、みなさんについて行けるものかどうか、不安でいっぱいでした。十一月二十三日の土曜、午前九時。阪急芦屋川駅改札口北側のトイレ広場に集まった受講生は、商店街と住宅街をぬけて、芦屋川の河川公園でミーティング。

その後、入念なストレッチ体操を行なって、これから登山するぞという信号を、各筋肉や神経に伝達します。このストレッチ体操のおかげで、登山後の足腰の痛みは、皆無に等しいのです。不思議だなぁと思います。

一行は、急な登り坂を、同じペースで、歩幅を広げないピッチ歩行で、少し足を外側に向けながら、少し足を外側に向けながら歩いていきます。途中に、芦屋三条古墳遺跡があり、古墳時代の人々のくらしがしのばれます。

河原の公園から歩くこと約三〇分。芦屋ロックガーデン入口の「高座の滝」の茶店に到着。ちょうど前を歩いている人も、ふき出た汗で、首筋あたりがキラキラと光り、さっそく衣服調整をします。次にベストなどの上着類をバッグに詰め込みます。

中央尾根に沿って登り続けること約四〇分。視線を眼下に移すと、展望もよく、市街地と大阪湾が樹木の間から見えると、疲れも一時忘れています。岩場を教室にして、登山技術の基本とも言うべき「三点確保」による登り方と降り方を、講師の説明と実習で体得。また、実習をしていたところのそばの砂防ダムに、野生の猪が十頭ばかり、遊んでいました。

やはり、芦屋ロックガーデンの岩場には、先の阪神大震災の傷痕というべき、岩場の崩壊が各所に見受けられました。いまだに危険な地点もあり、単独ではなく指導者の方と同行されることを、この誌面をかりて、お伝えします。

正午近く、風吹岩に到着。眼下の展望に、思わず見とれてしまいました。また、歩くこと約十五分。横池で昼食をとりました。この池の下を山陽新幹線のトンネルが走っています。リュックサックは、猪の略奪から守るために、自分の前におくように講師の指示がありました。講師が昼食後にわざわざガスボンベで沸かしていただいたコーヒーの味は、格別でした。午後は、下り坂が多いので、トレッキングシューズの紐（ひも）を少しゆるめ、足首の保護に気を配りました。打越山から十文字山にくだり、震災の傷が残る西岡本七丁目の住宅街から住吉川に出て、白鶴美術館前を通り、阪急御影駅北側の池のある公園で、再度ストレッチ体操をして、解散しました。今回の登山コースは、阪急電車の窓から見える山々だけに、何か親しみがわいてきました。

目のさめるような緑のシャワー、濃密で清んだ空気、そして額をつたう心地よい汗。仕事や時間に追われる毎日を過ごしているだけに、自分の足を使い、野山を駆け巡る機会が、実は心身のリフレッシュにつながる大切な時間と空間であることに気づきました。

アイホールウォッチング

アイホールに集う人々

想流私塾

書くことは〝夢の行方〟編のプロローグ

立石晶子

やっぱり辞めよう。

仲間と共に立ち上げてきたグループ。「心血注いだ！」と言うに近いものがあった。それを辞めると決心するのに円形脱毛症になる程悩んだ。自分たちで、ゼロから築いてきたものだ。その尊さは半端じゃない。でも、二つのことが頭をもたげていた。一つは、どうしても自分の夢の行方を確かめておきたい。もう一つは、グループが目指しているものと自分の思いにズレが生じている。筋違いの妥協はもう出来ない。引かれる後ろ髪を〝円形ハゲ〟と一緒に思いっきりバッサリ切った。

想流私塾に通うことはその「夢の行方」編のプロローグだ。お芝居が好きだった。ずっとやってみたいと思ってた。でも、事情があって、若い頃、出来なかった。今更始めるのは、たいそう気恥しかった。だが、「人より遅くなったけど、今、やっと、自分が思い続けてきたことが出来る時が来たんだ。」と気づいた。そしたら思いがあふれてしまった。二十年越しの片思いに決着をつけたかったのかも知れない。

もうすぐ人生の折り返し地点がやってくる。そんな時、想流私塾と縁があり『書く』事に出会った。それは、『自分自身がこれからどういきていきたいのか』を問い直し整理する事になった。

そして、どうやら、長年耕し続けてきた大地にようやく自分の芽を植えてやれそうな気配がしている。何を幹にし、どんな枝葉をどう拡げていってやればその木は喜び、豊かに茂っていくのか。うっすらとその姿が見えている。その木は、世界でたったひとつの木なのだ。

●プロフィール
アイホールで月二回開かれている、劇団プロジェクト・ナビ主宰、北村想氏による「想流私塾」に参加。伊丹市在住。

岩下徹ダンスワークショップ

意識を自由にあるがままの自分に向き合う

岡史郎

普通、踊りを習うというときには、ステップや振りの修得が目的ですが、岩下徹ダンスワークショップでは、身体の即興性を取り戻すことが目的と言っていいかもしれません。それは、人が本来持っていた身体性であり、踊りが自然に出てくる身体だと思います。何か新しい踊りの技術を身につけると言うよりも、外して行く作業に近いかも知れません。

即興ダンスは、ステップや振りを気にせず、好きなように自由に踊ればいいのです。ところが、自由に踊るというのがなかなかできません。どのようにするべきか？どんな意味があるのか？目的はなにか？普通そうした考えに支配されているため、「好きなように」というのはかえって難しいのだと思います。私の場合も以前は、即興的なものは、あまり価値のないものと思っていました。積み重ねていけるものが、価値があり、計画的に目標に到達できることだけが、重要だと考えてました。

即興ダンスでは、上手くやろうとしたり、何か意図が働くときには上手く行きません。それは多分「今」がおろそかになるからでしょう。即興とは何でしょう。即座に反応する。準備しない。上手くやろうとしない。とにかくその場に出す。だから誤魔化す必要がありません。そのことがあるがままの自分に向き合う練習になります。身体の緊張、習慣化した動き、単に動きのパターンだけでなく、考え方の癖まで見えてきます。無意識に貯めこんでいたものが意識化されてくる過程で、自然と外れていく、何かそんな感じがします。

生きるということは、本来即興的であって、自由でのびのびとした営みなはずです。しかし、実際には競争、批判、義務感などで、必要以上にこわばっています。意識が自由に、のびのびと解放されているとき、「いじめ」や「暴力」があるでしょうか？即興性を回復することは、とても大切なことだと思います。

●プロフィール
岩下徹ダンスワークショップに参加。コンピューターソフト・ハードウェアの設計会社を経営するかたわら、即興ダンスに触れ、自分の身体との対話をこころみている。伊丹市在住。

アイホールフラメンコ教室

フラメンコのリズムの中で自分自身を見つけたい…

寺井千香子

日本でのフラメンコ人気は高く、神戸や大阪の公演のときなど客席を見回すと、年配の女性ファンが多いことに気がつく。バルセロナオリンピック前頃から若い女性の姿も増え始めている。

「アイホールでも二十才代から五十才代の方が楽しく踊っていますよ。」とは、アイホールフラメンコ教室に通っている寺井千香子さん。この教室に通い始めてから五年がたつ。

フラメンコといえば、あの独特な靴音。運動生理学では、踵（かかと）への衝撃を「ヒール・ストライク」といい、適度な刺激は脳の働きを活性化させ、全身の血行をよくするといわれている。

寺井さんは小学生の頃クラシックバレエを習っていたが、フラメンコと出会ったのは大学生のときだった。旅行先のスペインでタブラオ（食事をしながらフラメンコを見ることができる。）へ立ち寄った。そのときの建物の雰囲気といい、踊りといい、スペインそのものにひかれ、フラメンコにひとめぼれしてしまった。

「フラメンコは華麗さと気迫さを兼ね備えたもので、踊り手の表現力次第でフラメンコのいろいろな面が出せると思います。」

フラメンコでまず身につけなければならないのは立ち方。それから足の使い方を学ぶ。靴を激しく踏み鳴らし、さまざまなリズムを生みだすサパテアード、急激に動きを止める見せ場のデスプランテ、指打ちのピートス、手拍子でリズムをとるパルマ。これらの基本の動きが、踊り手の感受性とオリジナリティによって複雑におりまぜられ舞台はすすんでゆく。

「フラメンコの歌（カンテ）・踊り・ギターと衣装、すべてが好きです。音楽が刺激的で、その曲の主人公を演じることはとてもおもしろいです。もっと練習時間を増やしてイベントに出れるくらいの力をつけたいです。今は月三回の練習ですが、週に二～三回は踊っていたいです。フラメンコ中心の生活になることが夢ですね。」

アイホール（伊丹市立演劇ホール）

ＪＲ伊丹駅西出口から歩いて約１分。オープンしてから７年目を迎える一方で、関西の小劇場演劇のメッカとして不動の地位を占めるようになって来た。１階のイベントホールは床が35に分割でき、それぞれが上下に可動する仕組みになっている。演出によって、自由に舞台や客席が組み立てられるわけだ。演劇はもちろん、ダンス、映画、講演会などにも利用されている。２階と３階にはカルチャールームがあり、フラメンコ教室等がここで開催されている（有料）。

開館時間　9:00～22:00
所在地　伊丹市伊丹２丁目４番１号
電話／ＦＡＸ　ＴＥＬ 0727－82－2000
ＦＡＸ 0727－82－8880
休館日　毎週火曜日と年末年始（12／29～1／3）
交通アクセス　ＪＲ伊丹駅（西出口）から歩いて約１分
阪急伊丹駅（仮設）から歩いて約８分

AI·HALL

実力派がそろう伊丹市吹奏楽団

結成二十三周年を迎えた伊丹市吹奏楽団は、市内中学校で吹奏楽部員だった人たちが、卒業後も活動を続けたいということで結成された。

現在団員は約一二〇名で、男性四割、女性六割。社会人五割、大学生二割、高校生三割という構成になっている。

市内在住または在勤であれば誰でも入団可能。

訪れたこの日、二階のメインホールでは、定期演奏会に向けて伊丹市吹奏楽団（以下、市吹）が練習に励んでいた。

集合時間の一時間前からすでに集まり、それぞれが熱心に練習している。

幅広い年齢層で構成されている楽団をまとめている、団長の松本治夫さんに話を聞いた。

「毎日練習に全員がそろうのはなかなか難しいですが、演奏会という目標があるのでそれぞれの自主性に任せています。技術力に差がでてくるところもありますが、市吹では全員が主役ですので全員に舞台に上がってもらうのが基本です。」

市吹の活動内容はコンクールの他、年二回の定期演奏会、年一回のポップスコンサート、市吹奏楽連盟主催行事に出演。又アンサンブルで、老人ホーム松風園やサンシティホールを訪れ、ボランティアコンサートを開き、〝毎月市内のどこかでコンサート〟を目標に活動している。

「ボランティアコンサートは、依頼がきて行くのではなく、演奏を聴いていただけたらということで、こちらから話をもっていってます。クラシックの堅苦しい解説は不要。とにかくゆっくりと聴いてもらって、やさしい気持ちになって帰ってもらえれば。」

一つの音楽をみんなで共有することができたという、こんな話がある。足が不自由で車イスに乗ったまま演奏を聴いていたおじいちゃんの足が、自然とリズムをとりはじめたり、おばあちゃんがこどもの頃を思いだして懐かしさのあまり涙を流していたそうだ。

ボランティアコンサートは、体の不自由な方やお年寄りの方、又大阪や神戸に出かけるのが困難な方たちにとってはとてもうれしいコンサートです。

一九九四年には全国大会で金賞を受賞した。そのときの課題曲の作曲者が、「自分の描いていたイメージに一番近い演奏だった。」と話された。

松本さんは言う。「作曲者がこの曲をどのような気持ちで作ったのか演奏者が理解し、それがメロディーになってあふれでたとき、その気持ちが観客に伝わります。その気持ちを理解したいという心の素直さが、ひとりひとりにとって大切なことだと思います。また演奏をしていて、指揮者と演奏者の呼吸が一致する瞬間がわかります。その時の演奏というのは、心が本当にひとつになったときに生まれると言えるのではないでしょうか。その音楽は観客に伝わるもので、こちらの心が受けとめられているか否かは、舞台上からもわかりますし、受けとめられたときというのは何とも言えない気持ちです。」

現在音楽を勉強している人や、これから始めようとしている人たちにこう話してくれた。

「まず、他の人と、時間と音楽を共有するという心のゆとりが大切です。いっしょに音楽を楽しみたいという思いは、必ず伝わると信じて演奏しています。

市吹の将来を支えていくのは、吹奏楽が好きな小・中学生たちだと思います。〝大きくなったら市吹に入るのが目標〟と言われるためにも、私たち自身、音楽を純粋に楽しむ楽団であり続けたいと思っていますし、その姿を見てほしいです。」

これからも団員は、学業や仕事との両立で多忙ではあるが、すばらしい演奏を届けていくことだろう。

団　長　松本　治夫さん
副団長　早川　嘉彦さん
音楽監督・指揮　永澤　護さん

アイフォニックホール ウォッチング

アイフォニックホール（伊丹市立音楽ホール）

市制50周年に、市の花「ツツジ」をイメージして建設された音楽専用ホールで、市民の音楽活動の場として演奏会や発表会などに利用されている。メインホールは音響効果にすぐれ、残響が約２秒あり、クラシック音楽向きの構造。小ホール（２室）は、ミニコンサートや講習会に向いており、個人練習のできるレッスン室（３室）がある（有料）。

開館時間　9:00〜22:00
所在地　伊丹市宮ノ前１丁目３番30号
電話／ＦＡＸ　ＴＥＬ 0727−80−2110
ＦＡＸ 0727−80−2120
休館日　毎週水曜日（水曜が祝日のときは翌日）
年末年始（12／29〜1／3）
交通アクセス　阪急伊丹駅（仮設）あるいはＪＲ伊丹駅から歩いて約７分

AIPHONIC
伊丹アイフォニックホール

ラスタ第一回生涯学習フェスティバルレポート

その一

平成八年十一月二十二日～二十四日にセンター登録団体による団体紹介パネル展示が開かれました。

ラスタホールを活動の拠点としている、〝センター登録団体〟というものをご存知でしょうか。現在四十一団体が、それぞれの生涯学習のひとつとして、様々な活動をくり広げています。その活動状況を一目でわかるように、エントランスホールでパネル展示会がおこなわれました。

写真ではほんの一部ですが、登録団体については、いつでもご紹介できますので気軽にラスタホール一階事務所までお問い合せ下さい。

その二

平成八年十二月二十一日には、多目的ホールでセンター登録団体によるステージ発表会がおこなわれました。七つの団体によるこのイベントは、銭太鼓・カラオケ・ハーモニカ・ウクレレ・詩吟とバラエティーに富んだステージとなりました。ラスタホール設立時から活動しているグループや、講座修了後に発足した若いグループと経験や分野はさまざまですが、みなさん目標に向かって練習されており、生き生きとした姿を見せてくれました。

ラスタホール（伊丹市立生涯学習センター）

愛称のラスタホールは光り輝く人生という造語で公募作品の中から選ばれた。広い１階ホールでは市民作品展が開催されたり、約６万冊の蔵書を持つ図書館南分館がある。２階には300名収容の多目的ホールがあり、さまざまな芸術文化鑑賞事業が、マイコン室、講座室、学習室、和室、創作室、調理室、児童室などでは多彩な自主講座が開かれている。３階では高齢者のデイサービス（入浴、給食、日常体力訓練など）センターがあり、４階には温水プールやアスレチックマシンが完備している（有料）。

開館時間　文化学習施設　月～土　9:00～21:00　日・祝　～17:00
図書館南分館　水～土　9:30～19:00　日・月・祝　～17:00
フィットネス　月～土　10:00～21:30　日・祝　～17:00
デイサービスセンター　日～土　9:00～17:30（月・火・祝　休館）

所在地　伊丹市南野字矢倉塚720－2
電話／ＦＡＸ　ＴＥＬ　0727－81－8877／ＦＡＸ　0727－81－9292
休館日　毎週火曜日（火曜が祝日のときは翌日）
年末年始（12／29～1／3）
交通アクセス
- 阪急伊丹駅より伊丹市バス「稲野８丁目」下車徒歩１分
- 阪急神戸線塚口駅北側出口より伊丹市バス「生涯学習センター前」下車すぐ
- 阪急伊丹線稲野駅より西へ600ｍ

ラスタホール

ラスタホール ウォッチング

ラスタホールを活動の拠点としている楽団による公開コンサート

午後２時の開演に向け、午前11時から熱のこもったリハーサルが行われました。
若い世代が中心となっている楽団なので、元気のよさがあふれていました。

今回のフェスティバルには二つの楽団が協力してくれました。センター登録団体ではありませんが、ラスタホールで定期的に活動しています。

平成八年十一月二十四日に『伊丹室内合奏団・イン・ラスタ』がおこなわれました。

この合奏団は、年に一～二回演奏会を開くことを目的に活動されています。バッハ・ヘンデル・モーツァルトなどからときには現代曲まで、弦楽合奏曲を中心に取り上げています。

この日は、バッハ「主よ人の望みの喜びよ」、パッヘルベル「カノン」など全九曲を披露してくれました。

また、十二月七日には、『待兼（まちかね）交響楽団ファミリーコンサート』がおこなわれました。

一九九三年に現在の団長の呼びかけで集まった大学オーケストラ経験者四十数名の有志により結成されました。

関西に数多くあるアマチュアオーケストラの中でも、演奏レベルの高さと、音楽のまとまりの良さでは定評があり、今後の活動が注目されています。

講演会の誌上再録
一人でも多くの人にとどけたくて

進む臨死体験研究 その意味するもの

講師　京都大学総合人間学部教授
カール・ベッカー

近年の医療技術の発達にともなって、ひん死の患者の多くが命を救われるようになりました。その中には、一度医師によって「死亡宣告」を受けたにもかかわらず、蘇生した後「私は死後の世界を見てきた」と報告する人があらわれ、いまでは無視できないほどの数にのぼっています。

臨死体験（ニア・デス・エクスペリエンス）そのものの存在は、否定できない事実になってきています。伊丹市立生涯学習センターが企画した講演会「進む臨死体験研究～その意味するもの」を誌上再録しました。

人の死――切実な問題になりつつあります。脳死をはじめ、臓器移植問題や先端医療とのかかわりの中で、人の死とは何かという論議がはじまったからでもあります。

臨死体験という言葉が、最近ようやく市民権を得るようになりました。テレビや週刊誌に特集が組まれたりするようになりました。そもそも臨死体験研究は今から約二〇年前に、アメリカで着手されました。私が日本で臨死体験研究についての論文を発表するにあたり、いろいろな困難に出会いました。

まず、臨死体験という言葉すらありませんでした。英語でニア・デス・エクスペリエンスですから、ニアを近いと訳して「近死体験」とか、あるいは「ひん死体験」「臨終体験」とした人たちがいました。広辞苑にも臨死体験という言葉が掲載されていなかったので、私の論文を書籍化するとき、出版社の担当者と大いに悩みました。そして「死の体験」あるいは「死ぬ瞬間」というタイトルに落ち着きました。そのころ、NHKの番組で立花　隆さんと組んで、日本で初めて臨死体験を紹介しました。爆発的な視聴率に達するとともに、大きな反響がありました。その後、自殺志願者が増えるのではないかという危惧から、続編の放送は企画されませんでした。

日本の著名な学者の中には、臨死体験は脳の錯覚であるという立場をとる人もいます。私が具体例を示すと「そんなことは有り得ない」と否定されます。今から二〇〇年前に、ナポレオンがベルサイユ宮殿にラボラジュエら当時のトップレベルの科学者を集め、個別に講義を聴くことがありました。当時発見されていた太陽系惑星は、せいぜい五個でしたが、ラボラジュエらは「陛下、私たちは、以上をもちまして、大宇宙を知り尽くしました」と答えたそうです。この傲慢さ、たった五個の惑星しか知らないのに、すべてを知ると言い切る科学者の姿勢は、当時も現代も、そう変わりはないと思います。私も科学者のつもりですが、科学を体系でなく、方法論として考え、それらに関する情報を集め、法則性を見極めていきたいと考えています。つまり、批判的で吟味する目を持ちながら、情報や事実を尊重することから、臨死体験を研究するものです。

人はみな死にます。でも、ごくわずかですが、ひん死の状態から、生き返る人がいます。最新の蘇生術などの発達が、それをもたらしている場合もありますが、死後の世界を垣間見て来た人たちが、その体験を第三者に語る機会が多くなってきています。以前は、自分の臨死体験を他人に話すと、頭がおかしいのではないかと、誤解されることを恐れて、口を閉ざす人が多かったのです。

次に、臨死体験はしたものの、それを覚えていない人たちもいます。私たちも、昨夜見た夢を覚えていないように。また、臨死体験をしない人もいます。つまり、何によってある人は臨死体験をし、あるいは臨死体験をしないのか？そういう問題が出てきます。これについて、次のような研究があります。臨死体験の要因の一つに、麻酔薬の作用、酸素不足、脳内物質のエフェドリンの分泌などが考えられたときがありました。アメリカのコネチカット州立大学に、国際臨死体験研究会の本部を置き、コンピューターに全世界の臨死体験の事例を入力してあります。臨死体験者が幼児期にどんな教育を受けたのか、どんな宗教を信じているのか、価値観や世界観をはじめ、主治医の診断カルテの内容など、数千項目にわたるデータがあります。そのデータをもとに臨死体験者の比率を比較検討しますと、麻酔薬や酸素を供給すればするほど、臨死体験者の出現率は下がりました。つまり、最新医療が臨死体験を妨害していることが判明してきています。

人の死を、脳波の停止と考える国と、そうではないと考えるところもあります。脳波が停止しているときに、臨死体験した人がいます。脳波がないときに、ベッドに横たわる自分を、病室の天井あたりから見下ろしたり、病院から抜け出して、自分の家で、両親が心配する姿や話し合う内容を見聞きするような体験例が報告されています。もちろん追跡調査で、それが事実であることも確認されています。

また、生死をさまようような重篤な状態でない人が、臨死体験をする報告もあります。何年も寝たきりの老女が、死ぬ数週間前に、体外離脱をして、それまで目が見えなかったにもかかわらず、ベッド横のテレビの取り扱い説明文がスラスラ読めたり、孫からもらった手紙の誤字を見つけたり。そのことを看護婦に話したところ、老女の言うとおりだったのです。

こうした臨死体験者が異口同音に、そのときの体験を次のように話してくれます。まず、苦痛がなく、例えようのないやすらぎにつつまれる。その光に入っていくと、美しい世界が広がっている。日本人の多くは、見わたすかぎりの花園で、そこで亡くなった家族に出会い、自分の人生を走馬灯のようにふり返る。それが、自分を視野に入れて、自分を見下ろす位置から見ているのです。まるでスライドを見るような人もいれば、ビデオの早送りを見るような人など、さまざまです。ところが、やがて、なんらかの境界線に行きあたり、もどってきます。日本人は大きな川を見ています。アラブ人は、燃えるような熱砂の砂漠。スコットランド人は、登れそうにない絶壁か渓谷。ポリネシア人は、航海できそうにない大海原。このように、容易にもどれない、わたれないという意味が、その人のその文化にわかるようなイメージで現れます。

さて、古来から日本人は、自分の死期を悟ったり、自分の臨死体験を往生伝として大切に書き残して記録しています。三途の川という概念は、もともと仏教にありませんでした。原始仏教には、六度四素という発想はありましたが、三途という考えが書かれた経典はありませんでした。十世紀あたりに、日本人が「偽教」と呼んでいますが、十王教を書き著して、その中で初めて三途の川を取り上げています。なぜかと言いますと、当時でも、多くの日本人が臨死体験をしていて、大きな川を見ているのです。それまでの仏教の概念にない三途の川を、臨死体験者が見ているため、大きな矛盾が広がり、仏教が日本人の臨死体験に合わせるようになったわけです。また、時代によって、臨死体験で見るものが変わって来ています。奈良平安時代の初期は、弥勒菩薩と地蔵菩薩を見たという報告が多々あります。阿弥陀信仰が始まる前に、弥勒信仰が定着していたためです。ところが平安時代末期から鎌倉時代にかけては、阿弥陀信仰がひろがり、臨死体験者の中に、阿弥陀さんを見た人が増えています。室町時代にはいると、観音菩薩やお大師さんなどが出てきます。こうした日本人の臨死体験を書き綴った往生伝は、明治維新以降、まったく書く人がいなくなりました。

日本人が大切に書き残した臨死体験の記録を、丁寧に呼んでいくと、現代の日本の医療現場で起きている臨死体験と、そっくりだということが、分かってきました。ただし、登場人物が、弥勒菩薩や観音菩薩でなく、自分の先祖が出てきます。

京都宇治の平等院の鳳凰堂に描かれた、阿弥陀菩薩が死者を迎えに来る壁画は、臨死体験のトンネルの先に見える光に酷似しています。宗教と臨

死体験のかかわりを研究する上で、重要な資料の一つです。

さて、臨死体験研究を始めるまでは、この世がすべてで、死んだあとには何もないと信じていました。しかし、今はそう簡単に決めつけることはできないと考えています。むしろ、肉体は死んでも、さらに生き続ける魂のようなものがあるのではないかとすら、考えるようになりました。臨死体験は、死にひんした脳が引き起こす幻覚にすぎないと主張する科学者もいます。でも、その解釈では説明のつかない体験が多くあります。

死後に何もないのでしょうか。全世界の文化や文明、民族などの伝承を調べると、死後の存続はあると考えています。そう思わなくなったのは、戦後の日本だけです。あの悲しい戦争で、死が美化された反省からかも知れません。でも、別の視点から、現代の死を、あらためて考え直す時期にきています。超高齢化社会の到来、先端医療や脳死、臓器移植問題など、いったい死とは何かを考えるとき、臨死体験研究は役立つはずです。

苦しくも、どんなことをしても、一秒でも、いのちを延ばしたい現代日本の医療の側面があります。でも、自分たらしめている自分の体を、捨てて、別の形や別の次元で生き残れるのなら、肉体に執着する必要がなくなります。つらいけれど、この世に別れを告げ、あの世で再会する約束をすることも出来ます。

一人の人間として、自然に死んで行きたい人もいますが、こうした考え方を持つ人が、尊重されない時代でもあります。でも、家族の死、自分の死、親の死について、たしかに話しにくいことですが、そのつらさを乗りこえて、語り合っておいてください。なぜなら、何も話せない重篤な状態になって、集中治療室でスパゲッティー症候群になってからでは、冷静に話し合えないからです。

臨死体験をしなくても、毎晩ベッドについたとき、きょう一日の出来事をふり返ることが出来るのなら、もっと真剣で、もっと慎重な生き方をするでしょう。かつて、日本では、自分の死を悟り、自分の最期を大切にしていました。そして、祈りがありました。でも現代は医療機器のモニター画面に映し出されるデータに気をとられ、祈りを忘れてしまっているような気がします。脳死体験者が呼び戻されるケースのほとんどは、家族たちが必死に呼び返しています。

会場は大きなため息にあふれ、死をみつめ、死のイメージをつかもうと努力する聴講生の姿とよりよき生への展望をさぐる方向に向かいました。質疑応答では、先の戦争で戦死した父の遺骨収拾に、明後日フィリピンに向かう高校教師から「夢枕」についての質問が出ました。これについて、講師のカール・ベッカー先生は、次のように答えられました。夢枕とは「出現物（しゅつげんぶつ）」と学術的に表現されています。防衛大学教授の大谷宗司さんが、戦死した日本の遺族を数千人訪ね、緻密なデータを集めていらっしゃいます。それによりますと、戦死したその瞬間、あるいは数時間ずれて、ほとんどの人が夢枕を体験しています。血だらけの軍服姿もあれば、玄関に立つ姿とか、さまざまな報告例があります。あの阪神大震災のときも、同じように夢枕や、なくなった人がすぐ横にいる気配を感じた人が多くいます。そんなことを第三者に話すと、否定されるのです。素直に、さまざまな具体例を認めることが、今必要なのです。

（プロフィール）
一九五一年アメリカのシカゴ生まれ。ハワイ大学で博士号（哲学）取得。八〇年、アメリカで国際ニア・デス（臨死）研究会を設立。臨死体験の先駆的研究者。八三年には体外離脱研究で米国アシュビー賞を受賞。比較思想史や比較文化論の中で、東西の生死観を研究中。主著に「死の体験」法蔵館刊など。

ママ業しながらエアロビしたい 託児付フィットネスラスタ

子どもをあずけたママはエアロビで汗を流し、子どもは集団の遊びの中から、個性をのばしていく。

最初は泣いていた子どもも、すぐに遊びに熱中します

汗を流すママたち

子育て中だって、体は動かしたい—。そんな女性たちの声にこたえてくれる「託児」付のサービスが、平成八年六月から、ラスタホール四階のフィットネスで始まっています。若い子連れママたちが、産後の体力強化や育児ストレスの解消、健康づくりとシェイプアップに汗を流しています。

毎週月曜日の午前一〇時、児童室をのぞくとアニメのキャラクターの絵が張られています。「ママー、ママーッ」と更衣室に向かう母親に、子どもが泣きながらしがみつきます。ひとりの女の子は最後まで泣きやまず、ママはきょうのフィットネスをあきらめたようです。託児の部屋として使用する児童室の広さは約二十畳で、一回あたりのフィットネスの託児に約八人前後が利用しています。

託児には保母資格をもつスタッフ二人が担当しています。一ヶ月分の託児カリキュラムをつくり、遊具や子どもたちの歌の楽譜を用意したり、きめ細かい準備に追われているようです。

スポーツ指導インストラクターの大井さんは「体力や体形のアップももちろんですが、同じ年頃の子どもをもつ仲間ができたり、ストレスを発散したり、精神的な効果も大きいようです。」と利用者の様子を語ってくれます。

保母の派遣業務は「アリーテ」という名前の市内の女性起業グループに委託。もともとは子育てまっさい中の主婦三人がつくった保育グループで、紆余曲折をへて、木造住宅を改造して、一時保育や母親教室、また出張保育などのサービスを提供しています。最近は「子ども虐待プログラムのCAP」の資格をとり、子どもと女性をめぐる問題のネットワーク化を進めています。

フィットネスの託児は、子どもたちにとっても、体験や学習の場にあることを意識し、その健やかな成長を支援する豊かな保育内容をめざしています。

子どもさんの普段の様子や、好きな遊び、家での名前の呼び方、アレルギーの有無などを保護者から聞いて、個別の保育カルテをつくっています。また、事前に「ならし保育」を行い、子どもさんと保育者がいっしょに遊んで、お互いを知り合う準備もしています。

もっと知りたい人権の輝き
育てよう「人権文化」

人権が時代のキーワードの一つとされる中、あらためて人権問題を考えるきっかけにしたくて…。

私たちのまわりには、テレビ、ラジオ、新聞、雑誌などのさまざまな情報であふれています。その中には人権問題にかかわるものも数多くあります。そこで、人権問題をテーマにした映画を五本取り上げました。

しかし、どの作品も人権侵害の悲劇のみを描いているわけではありません。

人間が困難な中で生きることの素晴らしさを、人権が尊重される社会を創造することの大切さを私たちに訴えかけています。

みんなが幸せに暮らせるように、お互いの人権を尊重し、かけがえのない「いのち」を大切にする心を育みましょう。

同和問題

人の世に熱あれ、人間に光あれ
「橋のない川」

製作総指揮　川口正志／高丘季昭
制作　山上徹二郎／山口一信
監督・脚本　東陽一
原作　住井すゑ
脚本　金秀吉
撮影　川上皓市
美術　川島泰三
音楽　エルネスト・カブール
出演　大谷直子／中村玉緒／杉本哲太／高岡早紀

ストーリー

明治四十一年（一九〇八年）。奈良の被差別部落に生まれた誠太郎、孝二の兄弟は貧しいながらも、お互いに助け合いながら暮らしています。けれど部落の子という理由で、クラスメイトや先生からののしられ、いじめられ、仲間はずれにされる、というような差別を受けて育ちます。成長した誠太郎は米騒動や出兵先などで社会にまんえんする差別に出会い、新たな疑問、怒りを抱くようになります。孝二もまた厳しい差別に直面しますが、家族や友人たちの愛に育まれながらたくましく成長していきます。折しも大正十一年（一九二二年）三月三日、被差別部落の人たちが、真の自由と平等と人間の愛を求めて結集し、全国水平社を設立。孝二は水平社宣言「人の世に熱あれ、人間に光あれ」に心を動かされ、部落解放運動に立ち上がります。

在日外国人問題

在日外国人とともに生きる
「月はどっちに出ている」

監督・脚本　崔洋一
原作　梁石日
脚本　鄭義信
撮影　藤沢順一
美術　今村力／岡村匡一
音楽　佐久間正英
出演　岸谷五朗／ルビー・モレノ／絵沢萌子

ストーリー

いい加減だが一本筋の通った硬骨漢でもある在日朝鮮人二世の忠男は、同じ在日朝鮮人の友人が経営するタクシー会社でドライバーとして働いています。人間の欲望渦巻く大都会・東京の街を日夜徘徊する忠男。差別や偏見などの人間の心の奥底に潜んでいるものが、タクシーという一つの小さな空間の中で吐き出されるとき、彼は愛想笑いとともにそれらを聞き流します。

難病への偏見と差別

人間の尊厳って何？
「砂の器」

制作　佐藤正之／三嶋四治
脚本　橋本忍
原作　松本清張
監督　山田洋次
撮影　川又昂
美術　森田郷平
音楽　芥川也寸志／菅野光亮
出演　丹波哲郎／森田健作／加藤剛／島田陽子

ストーリー

迷宮入りと思われた殺人事件。被害者の身元は判明したものの何の手がかりもなく捜査は難航。ところが、若き日の被害者を知る老人の話から、ある父子の名が浮かんできます。当時は不治の病として恐れられていたハンセン病に苦しむ父と、その父に寄り添い生きる少年の二人です。父の足取りをさぐる刑事たちは、ある天才音楽家にたどりつきます。

障害者の人権

誰もが幸せを実感できる社会を
「マイ・レフトフット」

制作総指揮　ホール・ヘラー／ステーブ・モー
制作　ノエル・ピアノフ
監督　ジム・シェリダン
原作　クリスティー・ブラウン
脚本　シェーン・コノートン
撮影　ジャック・コンロイ
音楽　エルマー・バーンスタイン
出演　ダニエル・ディ・ハイス／レイ・マカナー

ストーリー

アイルランドの画家であり、詩人であり、また作家でもある実在の主人公、クリスティー・ブラウン。彼は生まれながらにして重度の脳性マヒにおかされ、医者からは「植物同然にしか生きられない」との宣告を受けたのです。ある日、クリスティーが左足を使ってチョークで何かを書きはじめます。MOTHER……それが、彼の書いた最初の言葉でした。

女性・高齢者・子どもの人権

人権を確かめて
「楢山節考」

制作・監督・脚本　木下恵介
原作　深沢七郎
撮影　楠田浩之
出演　田中絹代／高橋貞二／望月優子／宮口精二

ストーリー

冬は雪国となる山奥の寒村。食料となる作物に乏しく、労働力が衰えた老人は、口減らしのため楢山の頂に捨て去らねばならない厳しい掟があります。長男のもとに嫁がやって来たのをきっかけに、そのうちに子どもが生まれ、一家が食料不足になることを悟った老婆は、自らの丈夫な歯を折り、わが身の衰えを早めようとします。

やがて、息子たちの制止を振りきって、老婆自身楢山へと向かう決心をします。生きていく厳しさの代償を、弱者が払わなければならない悲しさとともに、貧困ゆえの様々な人間ドラマが描かれています。

表紙／作者からのメッセージ

赤ん坊が、お母さんのお腹の中で、生を授かった時に、そのお腹の中で何を想い、何を夢みているのか、などと破天荒な事を考えてみたりします。それとは全く反対の事で人が生を終えた後、あの世では何を想い、何を見ているのか、なんてことも考えてみたりします。

人間という動物は、何だか変な生き物ですね。変なのは私だけかな？

栩山（とちやま）　孝（たかし）

1996年伊丹芸術家協会新人賞受賞

財団法人伊丹市文化振興財団

〒664
伊丹市南野字矢倉塚720−2
TEL0727−81−8877
FAX0727−81−9292